

# Ramsey-Hunt 症候群と考えられた 両側同時性顔面神経麻痺例

飯塚 崇 笠井美里 岡田弘子  
古川正幸 池田勝久

順天堂大学医学部附属順天堂医院 耳鼻咽喉・頭頸科

【はじめに】両側性顔面神経麻痺は両側同時性麻痺，両側交代性麻痺，両側再発性麻痺に分類されている。両側顔面神経麻痺は5%以下と比較的稀であり，そのうち両側同時性麻痺は0.9%とさらに稀である。今回我々は咽喉頭の粘膜疹で発症し両側顔面神経麻痺になった両側同時性 Ramsey-Hunt 症候群の1例を経験したので報告する。

【症 例】80歳の男性。平成21年9月5日より咽頭痛があり，近医受診するも軽快なく9月10日当科初診。左中咽頭から喉頭，下咽頭に白色の粘膜疹を認め，抗ウイルス薬を処方した。9月17日左顔面神経麻痺にて再診。経口摂取も低下しており入院加療としたが，翌18日軽度右顔面の麻痺出現し，19日には両側完全麻痺となった。頭部MRIは異常認めなかった。ステロイドは同意が得られず使用しなかったが，10日後には右の麻痺はほぼ回復し，左も改善傾向が認められた。発症9ヵ月後の現在40点法にて右40点，左38点となり，外来経過観察中である。

【考 察】両側同時性麻痺の病因として Bell 麻痺，外傷性，Guillain-Barre 症候群が多いといわれている。本症例では咽喉頭の帯状疱疹を発症後，両側同時性の顔面神経麻痺が出現した。水痘・帯状疱疹ウイルス感染後に Guillain-Barre 症候群をきたした報告が散見され，その一部の症例に両側顔面神経麻痺を認めているが，本症例では末梢神経伝導検査で異常を認めず，感覚障害もなく，各種グングリオシド抗体が陰性であったことなどから Guillain-Barre 症候群の診断基準を満たさず，この可能性は低いと考えた。また，Guillain-Barre 症候群には Facial Diplegia with Paresthesia などの一亜型が提唱されているが，これにも当てはまらなかった。よって本症例は両側同時性 Ramsey-Hunt 症候群と考えた。